

## 春は…

笠井 和明

昨年11月のとある日、新宿の「場末」で有名な「大ガード」下から、一人の仲間が救急車で運ばれた。

排気ガスにまみれた道路沿いにいつも居り、鉄格子のようなガードレールに背をもたれ、特に混雑する狭い道幅に横になって、夜な夜な、仲間なんだか、酔客なんだか賑やかな人々と共に、酒を酌み交わし、愛嬌を振り回したり、時にはそこで空き缶置いて「ギブミーマネー」と外国人観光客目当てにニコニコ営業したり、時には昔の仁義を思い出したかのような大げんかをしたりしてお巡りさんが駆けつけ、「またお前か」と説教されたり、捕まったり、その「主」のような存在でもあった。

かつて彼から「連絡会なんぞ大嫌いだが、笠井だけは信用する」と、やたら抱きつかれたことがあった。同じ酒飲みで、同じ無頼な人は、同胞だとその感性で分かるのか、まあ、そんな関係もあって、彼とは長いつきあいであった。

救急車で運ばれ、緊急入院し、検査したら新型コロナに感染していて、重症化もし、数日後亡くなったとのこと。

「えっちゃん」「えっちゃん」と仲間に親しまれた彼も享年71歳。

奄美から出て、新宿に流れ着き、建築現場やら歌舞伎町で、フォーマルかインフォーマルか、そんなことは関係なく、とにかく働き、その金で酒に溺れ、仲間が集まり、ヤクザ屋さんとも付き合い、一時は塀の中にも居り、そして戻り、まあ、そんなこんなで、この地で本当良く生きたと、思う。

そんな彼らに歌舞伎町で「ぼこぼこ」にされまくっていた我が愛すべき無頼の友「ジミー」君も、一昨年亡くなった。「えっちゃん」より一回り下の沖縄出身。共に辺境の地から新宿に流れつき、数奇な人生を送った、忘れられぬ特別な仲間である。

「野宿労働者」であるとか、「ホームレス」であるとか、「路上生活者」であるとか、今は「生活困窮者」で

あるとか呼び名は変わっても、それらの人々は、とても可哀想な人々で、社会の犠牲者であると、時にはとても同情されるのであるが、下層のこの世界を知れば知る程、残念ながら、そんなステレオタイプの人々ばかりではない。

人としての規範は幅広く、時には警察やら病院やらにやっかいになり、自分を律することは出来ず、本能だけで生きてしまって、色々な迷惑をかけて見たりと、そんな人々も多い。「普通ではない」そんな物言いはちと違うと思うのであるが、一筋縄で行かない人々とでも云うのか、それも含め、仲間である。

「何故ホームレスなんかをしているのか？」

下層を知らず育った人々から、そう聞かれることが多いのであるが、それは明確な説明は不可能で、人それぞれ。

そう云う問いには「色々あったからでしょう」と答えるようにしているのであるが、人生において、何らかの「不幸」や「失敗」ごとがあり、それと格闘しながらも解決策は見つからず、もがき、苦しみ、流れるように路上に至っただけである。皆、「わけあり」である。



その人曰く「こんな生活をしたら、僕だったら気が狂っちゃうだろうな」。

まあ、そうかも知れない。人生で何もかも失った時、きまじめなで、悩みがちで、変にプライドのある人々は、悲観し、自死もするかも知れない。

けれど、社会の底辺で必死に生きてきた人々は、何をしてでも、路上生活をしてでも、生きていくものである。そこに秩序がなにもなくてもである。それが、とても頼もしい。

今年の2月7日は、新宿駅西口地下広場でのダンボール火災事故から25年目の日である。亡くなった「えっちゃん」もその当事者であった。

4名の仲間を焼死させたこの事故、火元はあれだけの燃え方だったので特定は出来なかったが、ハウス内のストーブの火が、何かの不注意で燃えやすいダンボールに移り、延焼したとの見方が有力であった。

当時、100名近くが密集して暮す「ダンボール村」は、その密集と無秩序故に荒れていた。

その前日の夜のことを、今でも覚えている。その火元の近くに空いていたハウスがあり、仲間から泊まっていけと誘われたが、それは断った。ちょっと見る限りで翌朝シラミだけになりそうな環境であったからでもあり、必ず夜には一悶着が続いていたそんなところでは、あまり眠れないなと云う引きぎみの思いもあったのであろう。私の支援用のハウスと云うものも当時はあるにはあったのだが、その「内紛」により、数日前、ちょうど壊されてしまったばかりでもあった。なので、私は運良く命拾いをした。翌日、仲間からの緊急通報で叩き起こされ、荒川のアパートからタクシー飛ばして現場まで急行し、それから1週間、現場泊まり込みで東京都との交渉や被災者救援の対応が出来たのも、その夜、ハウスに泊まらなかったからでもある。

居座ることは不可能であろうと、現場についた瞬間そう思った。現場を知らない人々は何のかんと言っていたが、それにはまったく耳を貸さなかった。そして「自主退去」（避難したい仲間は、都との交渉で用意してもらった退去先へ、そうでない仲間は別の場所へ）と云う方針を早急に打ち立てた。

けれど、それに反対したのが「えっちゃん」のグループ。彼らは影響力がある人物だらけなので、これはちょっと大変だぞと、酒を飲みながら説得し、最後の最後で納得してもらった。

2月7日の火災は、色々な人の人生を変えてしまった出来事であった。かく云う私も、あんな事故がなければ新宿からとうに足を洗っていたかも知れない。

当時を知る古い仲間は、次々と他界している。25年前、被災者は西口地下全体で150名程度いただろうか、多くの人々が影響を受けた。それぞれの人生もこの事故を

期に変わった。そしてその後、おのおのがおのおの道を歩み出した。結果、バラバラになったが、その方が良かったのであろう。

神も仏もない世界では、無念追悼もないだろうが、それでも、「無念追悼…」と、25年目の新宿駅西口地下広場に、献花と共に頭を垂れた。その帰り、大ガードに立ち寄り、場末の新宿と、今はなき場末の仲間たちにも手を合わせた。

……

今年の越年越冬は、そんな仲間の「過去」と「未来」、そして、「生」と「死」の狭間のような越冬であった。

新宿では飲食店も通常営業に戻り、「クリスマス」も「カウントダウン」も「初詣出」も、3年ぶりの「自粛」やら「規制」なし、外国からのお客さんも完全とは言えないが、戻りつつあり、「マスク規制」もこの春で撤廃と云うことになりそうである。

まあ、それにしてもすごい流行（パンデミック）であった。東京であったり、大阪であったり、人口が多く、密集している都市を中心にこうなってしまったのであるから、これはとても困った問題であった。

都市部に集まる「失業者」や「疾病者」や「わけあり人」は、人が密集しているところでしか生きてはいけない。人が密集しているから隠し事も効くし、個人を消すことも出来るし、人が多いからこそ路上に寝ていたとしても、それを誰も不思議にも思わない。貧しい人々が密集したが、グループなり、村を作るのは、そこで安心したり、助け合ったりも出来るからである。群衆の中、同じ立場の人々が密集し、そして生きていこうとするのは都市ならではの生きる知恵でもあり、本能でもある。

それが出来なくなったのが「コロナ渦」であったが、何よりも、その「規制」や「自粛」により、繁華街の人混みであるとか、飲食店であるとか、流通業であるとか、経済が一部で麻痺状態になることによる影響を少なからず受けてしまった。これは一言では言えない。その人がどの立ち位置かによってまた違う。路上に暮していると云う属性での影響はほとんどなかったものの、それぞれの生業での影響はかなりあった。

なので、「定額給付金」を貰いながら、路上生活を続けていても誰も文句を言う者はなかった。「いやいや、助かったよ」と貰った人は感謝し、手続きが煩雑故に貰わなかった人や、住所を整えることに抵抗があった人は「まあ、そんなもんさ」と、あまり執着もせず、諦め、仲間のおこぼれを貰ったりしていた。競馬で万馬券を当てたような感覚なのであろう。まあ、それはそれで良い。

コロナの流行は、もちろん路上生活の仲間にも感染したが、そもそも屋外の暮らしなのでクラスターにならな

かったので、世間はあまり気にもしていなかったようである。それよりも路上生活者が就労したり、自立したり、元の生活に戻ったりするための「施設」や「簡易旅館」などではクラスターが頻発した。その感染が元で亡くなる方も多く居た。ここもまた密集しているのが当たり前前の場所である。「個室化」「個室化」などと言われているが、貧者が住まう場所で「完全個室」など望むべくもなく、表向き「個室」をうたっている、共用部分はとても多い。都心部は地代が高いので、必然そうなるだけで、都市で暮す以上、それは許容しなければならない事柄で、根本から変えようはない。

「ネットカフェ」に営業規制をかけたことがきっかけで、潤沢な資金のある東京都による「緊急事態宣言」期間中の「ビジネスホテル提供」というものも行われて来たが、それに巡り合った人も、結局は一時の間。流行が収まればまた元の暮らしに。

なんと、この事業、食事が出ないとのことで、それは困ったと、炊出しに並ぶ。どこの炊出しも、もちろん「密」である。結局は混雑した場所に「不要不急」の外出をしまくり、安全な個室には寝に帰るだけ。なんともチグハグな対策であった。

これなど訪日外国人や旅行客が来なくなった都内のホテルを、上手に利用しただけの策で、「コロナ渦」で不況に陥ったホテル業界を救う目的だったのかも知れない。

この冬も、前年同様に「ホテル」をと、都議やらが要望したようであるが、その時既に都内のホテルの予約はいっぱいであった。今年の冬は訪日外国人の人出も戻って来た。年末年始も新宿はかつての程度ではなかったものの、懐かしく、異国語が飛び交う、いつもの街であった。その多くが都内のホテルを使い、民泊を使う。困窮した人々のシェルターの代わりには、もちろんならない。

自前のものではないので、いっぱいならば使えない。一定程度確保しておけば良いのであるが、その場、その場の東京都にそんな発想はない。

仕方がないので数を減らして、山谷の簡易旅館（ドヤ）を期間限定で使ったようである。山谷の簡易旅館も「〇〇ホテル」という名前もある。「俺は都の世話になってホテルに泊まって来たよ」なんて云う仲間に、聞いてみたら「実は山谷のホテルなんだよ」と、笑い話になるくらい。

「新型コロナ」に関連した色々な施策は、急場でもあって、それこそ「想定外」の事態でもあるので、何もかもやりと、そんな感じであったが、まあ、そう云う「無駄遣い」も必要で、効果があってもなくてもやってみることが肝心だったのであろう。

けれど、路上の立場からすれば、これらはやはり、「普通の人々」への対策であり、住所があるのが当たり前、スマホを持っているのが当たり前を前提にしたものとうことである。私たちは、それにあわせ住所もお貸

ししたり、申請の同行などとしたのであるが、まあ何もかも煩雑で、色々と苦勞をさせられた。

住所を置けば良いかと云えば、そうでもなく、「請求書」やら、親族からやら、色々な書類が舞い込んでも来る。色々な人々が直接会いに来たり、押し掛けて来たりもする。そう云うのが嫌で路上生活をしているのに、そう云うのが必要になった時、諦めたりもするし、失望もしたりもする。社会とは、「まっとう」で「普通」な人のための社会であり、色々な対策もまた同じ。

都心の路上も駄目ならどこに隠れようか。そんな流れも生まれて来ている。

支援の形も変わった。

あれをしてはいけない、これをしてはいけないと、この世界にも得体の知れない規範が出来る。「応急援護」と「自立支援」の評価は低くなり、生活保護にすべて流し込めばそれで良い、あとは、すべて政治や行政の問題だと、そんな風潮が支配するようになった。まあ、質の悪い「評論家」が多くなったと云うことでもある。

その一方、夜の新宿でホームレスを直接対象にし、こつこつと支援活動が続ける人々もまだまだ居る。路上生活の人々を対象にするのであれば、この方法の方が実態はよくつかめるし、ニーズもまたよく分かる。ここは個人であったり、小さな団体であったり、小さな教会であったり、それぞれが精いっぱいやっていて、社会正義に駆り立てられて近視眼的に「必死」な人々とは、おもむきが違う。とてものおんびり、マイペースである。

私たちも、変わらず古ぼけたつり橋を、実にゆっくりと、揺れながら、揺れながら、それでも急ぐことなく、歩いている。地道な活動は、あまり「コロナ渦」だとか、「対策」だとかにはリンクしないようである。

社会的にどうのこうの、地域的にどうのこうのではなく、人が人を心配する気持ちが、地域を良くし、社会を良くする。それがたとえ自己満足であろうとも、そう思うのである。一人ひとりを大切にすることとは、一



人ひとりに声をかけると云うことである。それに応えられない人がいても、その人を排除することなく、じっと待っていることである。そう思うようになった。

……

さて、越年越冬であるが、それなりに、状況を位置づけ、「主体」と「客体」を捉え直し、その上で最善の策をと、何かと色々と練り、現状において取りうるすべてを出しきった行動となったと思ったのであるが、それは所詮いつもの通りの「自己満足」の世界で、年明け、都庁下で、一人の仲間の死によって真水を浴びせられることとなった。

石原都政の大仕事でもあった「地域生活移行支援事業」が終わりかけ、中央公園では新規のテントが張れなくなった頃、彷徨の末、新宿に到着した人々は、都庁の下に次第に集まり始めた。その頃ダンボールやらブルーシートやらを駆使して小屋を建て始めた仲間の中に彼女の姿があった。女性であることで仲間の注目を浴びていたが、メンタルの問題を抱えていたようだ。そのせいもあり関係を作ることがとても難しかった。連絡会の相談スタッフやら、医療班の女性スタッフやらが、長年接触を試み、何かのきっかけがあればと、探りを入れ続けて来たが、それらはどれも失敗に終わり、彼女は彼女の世界をその場で作り、そこで住み続けた。そうこうする内に、そこにいつも居る「おばちゃん」と云う立ち位置を彼女は確保し、あまり気にもされず、干渉もされず、生きていくことになった。

なので、日常的に接していた私たちも、その仲間達も、彼女のことは、あまり知らない。

目立つところに居たこともあり、「生存確認」みたいなものは常にしていたので、無視をしていたわけではない。気になるが、それを表にすると拒絶される。ならば、見続けているしかない。そんな関係であった。

年明け、区役所の巡回チームが、彼女の骸を発見した。年末には既に亡くなっていたのかも知れない。そうとも知れず、その周辺で「越年越冬」だと、能書き垂れて、うごめいていた私たちをあざ笑うかのよう。

彼女は「さようなら」を、誰に伝えたかったのだろうか？

私たちは何をすべきだったか？その答えはまだない。怒りや悲しみをぶつける方角も分からない。「無念追悼…」を念仏のよう何度も何度も唱え、それで救われると思っている、哀れな坊主のようである。

……

年末年始は、これまでと趣向を変え、私たちの「原理原則」、つまり、「仲間の、仲間による仲間のための取り組み」に徹し、新宿中央公園に拠点を作り、そこで、「相談」「衣類配布」「炊出し」と云う、これまた私たちお得意の十八番藝を連日行くと云う手法を取った。スタッフは関ビルに泊まり込み、そこで調理作業などをし、新宿中央公園に繰り出す。夜は三々五々、関ビルに戻り片づけをしたり、深夜には新宿駅のパトロールをし

## 2022-2023 越年期活動報告

	健康よろず相談会 新宿中央公園特設テント内14時30分より 16時前後	衣類提供 新宿中央公園特設会場	炊出し 食材加工調理は関ビル調理室 配食は新宿中央公園にて午後17時より
12月29日(木)	12名(血圧測定+市販薬提供)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	麻婆丼 食数170食 実数103名
12月30日(金)	15名(血圧測定+市販薬提供)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	猪木追悼ラーメン 食数200食 実数144名
12月31日(土)	22名(医療班対応 別報告参照のこと)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	いろりん米とモツ煮込み 食数200食 実数103名
1月1日(日)	13名(血圧測定+市販薬提供)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	牛丼 食数200食 実数134名
1月2日(月)	20名(血圧測定+市販薬提供)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	しらす丼 食数200食 実数111名
1月3日(火)	27名(医療班対応 別報告参照のこと)	約40名(防寒着、毛布、ホカロンを重点的に提供)	カレー丼 食数200食 実数158名
計	延べ109名	延べ約240名	食数1170食 延べ751名 平均125名

たり、大晦日は都庁下で「年越しそば」や「お神酒」を配り、西口地下広場で「メロンパン」と「甘酒」を配りと、仲間の居るとこ、居るとこへと移動をした。

「仲間の命は仲間を守る」。これは、ある程度（本当にある程度でしかないが）まで出来たのかも知れない。

「生きて奴らにやり返す」。それはきっと出来ないかも知れないが、俺らが生き続け、存在し続けることが、きっと何かに繋がることを信じて。

まあ、何年やろうとも同じ過ちを繰り返す。人と人の関係に絶対はない。「支援」も「対策」も「総体的」なものでしなく、今あるそれで、すべてが完結する訳ではない。しかし、それでも続けていかざるを得ないのは何のためなのだろうか？

「仲間のことを思って」「社会のためを思って」とは、誠に「奇麗事」であり、単に「放っておけない」と言った方が正確かも知れない。

惰性でも構わない。その規模が大きくても小さくても構わない。新宿の路上に魅せられ、取り憑かれた私たちは、いつ終わるとも分からない活動を、これからも続けて行くのであろう。

連絡会も来年、30周年の節目となる。1994年の夏、「仲間の会」と、山谷等から駆けつけた支援者が合流し結成されたこの組織は、色々ありながらも、粘り強く、今も新宿の地ではいずり回っている。それは仲間の信頼

があったからこそである。そんな信頼を背景に、「走りながら考えて行く」であったが、支援の側も高齢化し、足腰が弱くなって来たので、今は「考えながら歩んで行く」か、そんなスタンスで活動をしている。

冬も終わり、また春が来る。そこに希望があってもなくても、生きていかねばならぬ苦しみの中、その歩みを止めることはない。

まあ、生き残れたは良いが、その先に何を見い出していくのか？それが、なによりも難しいのであるが、そこは、「ケ・セラ・セラ」。

(了)



巡回	激励	その他
21時より深夜までコースは通年コース		越年連絡会チラシNO69号発行 配布
毛布、お菓子（コアラのマーチ）提供 出会った仲間の数137名		炊出し時に猪木DVD上映
	「さすらい姉妹」の方々による 路上劇15時より実施 五十嵐正史&ソウルブラザーズによる 路上ライブ16時30分より実施	越年連絡会チラシNO70号発行 配布 21時より 都庁下にて年越し蕎麦、みかん、お神酒など配布 54名 23時より 西口地下にて甘酒、メロンパンなど配布 26名
毛布、非常食（カロリーメイト）提供 出会った仲間の数141名		越年連絡会チラシNO71号発行 配布
越年期新宿駅周辺で夜間路上で寝ていた仲間の数 平均139名		

今年度越年期活動中、医療班として以下の活動を行った。

参加ボランティアは延べ23名、医師4、歯科医師2、薬剤師3、MSW1、一般2名であった

12月25日（日）

\*おにパト同行「訪問健康相談」

参加者：5名

対応者：43名 血圧測定12名、薬37名、診察・紹介状1名

紹介状：通院が6カ月できておらず服薬中断、1週間前から片手の麻痺出現、  
12月26日に福祉申請し受診となった

\*深夜パト

参加者：1名

対応者：17名、薬11名、相談2名、検温1名、生活用品3名

12月31日（土）

\*中央公園机だし相談

参加者：7名

対応者：22名、血圧測定7名、薬18名、相談のみ2名、診察・紹介状1名

診察・紹介状：脳梗塞後治療中断

紹介状：12月25日深夜からの継続相談、1月4日福祉申請することになった

\*21時からの蕎麦（都庁下）+23時からの甘酒（西口地下ロータリー）

参加者：2名

21時：薬提供3名

23時：相談3名

1月3日（火）

\*中央公園机だし相談

参加者：医師2名、歯科医師1名、薬剤師2名、一般1名

対応者：27名、血圧測定9名、薬24名、診察・紹介状3名

診察・紹介状の3名のうち2名は、12月31日相談のみの2名で、1名は持病の服薬継続希望、もう一人は胃潰瘍の既往があり胃痛再発。2人とも1月4日に福祉申請の予定とした。もう1名は、皮膚炎で自身で受診するとのこと

1月4日（木）

\*福祉申請同行

参加者2名、紹介状提供者3名来所

1名生活保護受給、2名は他区での生保継続中と判明、そちらで再相談となった



医療班 大脇甲哉

# 越冬期 巡回 おにパト報告

越年越冬期の巡回活動は越年の前後に集中させ、こつこつと、また、じっくりと実施しました。越冬前と後では人数はほとんど変わらず、一定の仲間がいつもの場所（小田急本店の閉鎖工事等の西口再開発や東京マラソンの通常実施などで若干の変化はあるものの）にいる構造が続いています。それぞれが、それぞれの訳や悩みや困難を抱えながら、それでもしぶとく生きています。最近は「缶から」を置く仲間も増えました。それもまた「都市雑業」。みな、自分の力で生きていきたいので、「おらあ、まだまだ路上で頑張るぞ」と言った感じです。

## おにぎり巡回パトロール 11-2月越冬期実績

		都庁	西	公園周辺	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
						(前年同月比)				(前年同月比)	
2022~ 2023	11月6日	49	21	20	45	135					
	11月13日	42	14	20	36	112					
	11月20日	43	25	28	47	143					
	11月27日	34	18	25	32	109					
	11月平均	42	20	23	40	125	(▲19)	12	7	144	(▲17)
	12月4日	37	22	14	47	120					
	12月11日	47	20	21	25	113					
	12月18日	48	15	19	43	125					
	12月25日	47	19	23	30	119					
	12月平均	45	19	19	36	119	(▲3)	14	7	140	(+1)
	1月8日	47	19	23	30	119					
	1月15日	36	25	20	46	127					
	1月22日	40	30	11	27	108					
	1月29日	42	22	22	31	117					
	1月平均	41	53	53	53	118	(▲13)	11	9	138	(▲8)
	2月5日	44	24	21	48	137					
	2月12日	37	18	17	38	110					
	2月19日	50	19	22	34	125					
	2月26日	45	18	20	31	114					
	2月平均	44	20	20	38	122	(±0)	12	8	142	(+5)
									4ヶ月平均	141	(▲5)

## 深夜巡回（パトロール/軽食配布、毛布配布11月より2月 越冬期）活動で出会った仲間

2022-2023	日時	天候	4号街路	都庁下周辺	西口地下	西口地上	東(御苑舎)	大ガード周辺	新南口周辺	深夜計
	11/13-14深夜	曇	9	44	52	14	7	5	21	152
	11/27-28深夜	晴	14	41	52	9	6	3	14	139
	12/11-12深夜	晴	22	39	55	9	7	1	17	150
	12/25-26深夜	晴	18	41	44	6	7	2	14	132
	1/8-9深夜	曇	16	34	38	5	11	2	15	121
	1/22-23深夜	晴	21	37	44	8	10	1	17	138
	2/12-13深夜	雨	21	38	43	8	8	1	18	137
	2/26-27深夜	晴	19	39	47	9	8	4	13	139
									平均	139名 前年比+12名

# 春へ

年が明けたら東京にも寒波が幾度もやって来て、氷点下の日も長く続きました。これまでの暖冬とは違い、本格的な冬となりました。

私たちの日常活動も毛布、防寒着、携帯カイロ類を中心に防寒体制をしっかり整えてもらえるよう、大量に提供すると云う方法になりました。

「ホカロン大作戦」と、どこも通常一、二枚ぐらいしか置いてってこれないのですが、それを使ってしまったら後がないでは困るので、可能な限り多く（袋単位）で渡したり、もっていってもらっています。寒くなると神経痛のような症状になる仲間も多いです。皆、肉体労働を続けて来たので腰痛などの仲間も寒い時は大変で、ホカロンひとつ貼るだけでもだいぶ違います。そんな需要にも応えていこうと、とにかくあるだけ出し、足りなくなったら購入してと、越冬後段は携帯カイロは大活躍しました。

毛布は必要な仲間にはだいたい行き渡り、あとは入れ替えとなります。倉庫の毛布も減りました。それでもまだ在庫は残しているので、こちらは継続して6月頃まで提供を続けていく予定です。

防寒着は募集を停止し、これからは春ものの衣類の提供となります。

食事の提供も「おにぎり」「非常食」（カロリーメイト、コアラのマーチなど）提供を巡回活動とあわせ続け

ています。シャワーサービスも年明け再開し、そこでも軽食の提供をしています。

何とかこの冬、踏ん張りました。

今年も仲間の花見を予定しています。仲間と共に冬の疲れを癒したいと思います。



## 新宿連絡会 会計報告

新宿越冬越冬の取り組みへのご支援、ありがとうございました。毛布、お米、防寒着など物資を始め、多くのカンパを頂きました。それらは越冬越冬の集中的な取り組みのため、大方使わせて頂きました。

皆様方のご支援で連絡会は多様な活動を続けられています。「区内のあそこに路上の人が居るので支援して欲しい」との声も頂いています。路上の人々を気にかけて頂いて本当に助かります。可能な限りあちこち出向き、路上の仲間へ声をかけ、必要なものを提供する。そんな基本に立った支援活動をこれからも続けて行きたいと思います。引き続きご支援の程、宜しくお願いたします。

## 2022年度 11月～2月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
1 計上収入の部		2 管理費	
1 寄付金収入	1,770,124	旅費交通費	26,040
		通信費	152,176
計上収入合計	1,770,124	消耗品費	41,506
		事務用品費	55,647
II 計上支出の部		事務所費分担金	120,000
1 事業費		衛生管理費	1,100
おにぎり/炊出し事業	100,019	支払手数料	44,125
巡回活動費	181,794	車両費	19,642
農業支援事業費	8,230	修繕費	0
その他活動事業費	78,112	計上支出合計	1,540,110
越冬越冬事業費	711,719	計上収支差額	230,014
		前期収支差額	56,204
		次期繰越金	286,218

●活動カンパ 振込は 郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所をお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。